

„Würde + Infinitiv“ に 就 いて

奈 良 文 夫*

(信州大学文理学部)

或る不可能なる、事実ならざる事柄を前提とし、その結果として起るべきことを、想像的に敘述する場合（以下これを約束話法と呼ぶことにする。）には、前提部（Protasis）と結論部（Apodosis）には共に、接続法の過去群（Präteritumsreihe）が用いられる。

- 1) Ich schriebe den Brief, wenn ich Zeit hätte. (現在の事実の反対)
- 2) Ich hätt den Brief geschrieben, wenn ich Zeit gehabt hätte. (過去の事実の反対)

而して、結論部は、しばしば意味に於て変ることなく、würde+Infinitiv を以て書き換え（umschreiben）られる。この形は、一般に条件法或は約束法（Konditionalis）と呼ばれている。

即ち、

- 1) Ich würde den Brief schreiben, wenn ich Zeit hätte. (第一条件法)
- 2) Ich würde den Brief geschrieben haben, wenn ich Zeit gehabt hätte. (第二条件法)

約束話法に於けるこの条件法の使用は、近代のドイツ語に於ては、漸次使用の度を増し、単純なる接続法の形を圧倒する傾向にさえあると言われている。而して、接続法過去群（特に過去形）を würde+Infinitiv を以て書き換える用法は、その他凡そ接続法過去群が使用される場合には、相当広く行われているのである。これは、würde+Infinitiv の歴史的成立過程からしても、自然の事のように思われる。

以下、この würde+Infinitiv の形は、いかなる場合に用いられるか、又近代の傾向としては、いかなる意味を示す方向にあるかに就き、特に重要と思われる点を考察して見たいと思う。

先ず最初に、würde+Infinitiv の歴史的成立過程に就いて考察してみよう。近代ドイツ語では、未来を示す形式として、一般に werden+Infinitiv の形が用いられている。しかし、werden+Infinitiv を以て未来時称を表わす語法が成立したのは、Nhd. になつてからのことである。元来ゲルマン語には、未来を表現するための一定の形式がなく、一般に現在の形を以て、未来にも代用していたのであるが、未来の意味を厳密に表現したいという必要のため、種々なる表現法が用いられ、Ahd. では、普通 sollen, wollen, müssen+Infinitiv の形式を用い、Mhd. でも、主としてこの書き換え形式が引続き用いられ、werden+Infinitiv による未来時称の表現は、可成り稀であつた。

而して、Mhd. 及び Nhd. の初期にあつては、werden+Infinitiv の形よりも、

* 信州大学助教授

werden+Partizip des Präsens の形の方が普通で、Infinitiv の形も Partizip des Präsens から変化したものと言われている。後になつて、Partizip des Präsens の使用が廃れ、Infinitiv が専ら用いられるようになったのである。しかも、いずれの形も、最初は未来を表わすものではなく、werden が本来の意味を持つていた。従つて、この形は一般に動作、状態の開始を表わすものであつて、単純な動詞と時称の関係は全く同一で、ただ、動作の態様 (Aktion art) を異にするだけのものであつた。即ち、werden+Partizip des Präsens od. Infinitiv の形は、動詞の inchoativ (起動的) 或は perfektiv (完了的) な態様を表わす機能を持つていて、werden は現在のみならず過去に於ても用いられた：Recht als das wach von der haissen sunnen smeltzent wirt und zerfliessent, also wirt du sele smeltzende von der waren sunnen, unserm herren Jhesu Christo. (St. Georger Prediger) ……Das kint wirt gēnde und redende. (Berthold von Regensburg) ……Si wurden trinkende. (ibid.) ……Dēr hēre ward vēhtent mit dēm volke. (Griesh. Pred.) ……Diu wazzer dēr zēher sint vliezen de worden. (ibid.)

上例の如く、werden+Partizip des Präsens od. Infinitiv は、或る動作状態に入る一点を示す inchoativ の機能を有するものであつたが、後になつて、場合によつては、inchoativ の意味が弱まり、或る動作、状態に入るという考えが、行為全体におよぶという考え方に移り、その結果、この形が、元の動詞の単なる書き換えにすぎないという語法も生じたのである。即ち、ich werde laufend (od. laufen) = ich laufe, ich ward laufend. (od. laufen) = ich lief という関係になるのである：Du werck du von tugenden gant, da mit werdent die tugend all gefüret und wachsend. (St. Georger Ped.) ……Solon wart disen pilgram fragen, wie sein vatter genennet wer. (H. Sachs) ……Da ward das ganze Heer laufend. (Luther) ……Moses ward zittern (ibid.)

故に、werden+Partizip des Präsens od. Infinitiv の形は、一方に於ては、純粋な inchoativ の意味を持ち、他方に於ては、単純なる動詞の単なる書き換え形式となつた。そして、後者は無用なる語法として漸次文語からは消滅して行つたのであるが、例外的に接続法の würde+Infinitiv の形が残り、頗る有用な形として盛んに用いられるに至つた。尤も今日でも、方言や俗語などには、相当広くこの語法が残つていられると言われている。他方、inchoativ の意味の現在の形が漸次本来の意味を失ひ、単に未来の時を表わす形式に発展して行つた。即ち、動作の開始は、未来の動作を暗示するのが自然であるので、Mhd. にもすでに、未来を意味すると思われる用例が散見されたが、それが、一般的な用法となる迄には至らなかつた。而して、werden+Infinitiv が未来を表現する形式として確立するや、現在以外の時称の形は消滅する結果になつたのである。更に未来のことは不確定であり、想像の世界に属し易いので、werden はしばしば時の助動詞としての性質が薄れ、話者の主観を表わす話法の助動詞として、推測、想像などを表現するようになつた。即ち、

werden+Infinitiv=inchoativ の意味 { 単なる書き換え形式 (würde+Infinitivを除外) 文語から消滅

↳ inchoativ の意味 → 未来の意味*

* { 未来の意味
推測, 想像の意味

(但し, Curmeなどは, 推測, 想像を示す意味は, 未来の意味から発達したものではなく, むしろ, 単なる書き換え形式の現在の意味が, より消極的になり, それより生じたものであるという見解を取っている。)

なお, werden+Infinitiv Perfekti は未来完了を表わすが, (この形は, 同時に, 完了した事柄に就いての推測, 想像にも用いられる。)この形式は Mhd. には見られず, werden が未来の助動詞として確立した後に生じたものである。従つて, 第二条件法と呼ばれる würde+Infinitiv Perfekti の形は, werden が未来の助動詞として確立した後, 画一作用によつて造られた形で, 第一条件法である würde+Infinitiv とは成立過程も異り, 時期的にも, はるか後になつて造られたものと言えるのである。以下, 主として, 第一条件法の形である würde+Infinitiv について考察し, 必要に応じて, 第二条件法たる würde+Infinitiv Perfekti にも触れて行きたいと思う。

さて, 上述の如く, ich ward laufen=ich lief という書き換え形式が存在したことは, würde+Infinitiv が, 接続法過去形の単なる書き換えになり得るといふ歴史的根拠が, 与えられているわけであるが, しかれば, このような語法に於て, 何故直説法の用法が廃れ, 接続法の形だけが用いられるようになったのであろうか。Blatz は, これに就き, 次のような理由を挙げている。

1) 弱変化動詞にあつては, 接続法過去形と直接法過去とが, 形式的に全然一致して, 区別し難いこと: ich lernte, lenkte, räumte, befreite.

2) 多くの強変化動詞の接続法過去形と直接法現在とが, 発音上区別でき難きため: ich läse—ich lese, ich träte—ich trete, ich sähe—ich sehe.

3) 強変化動詞の tränke, käme, böte 等の如きは, 平明なる散文では, 態とらしく億劫に感ぜられること。

以上 Blatz の挙げている理由は, 主として形式的な面に就いてであるが, それ以外に, 心理的な要素としては, 今迄, 単なる語形変化や, 形態変化で表現していた事柄を漸次独立した助動詞を以て表現するという, 近代西洋語の一般的趨勢にドイツ語も従つていふという面も, 考えることが出来よう。更に würde+Infinitiv が, 口調がよいということも見逃すことの出来ぬ事実であると思う。

以上で, 未来の助動詞, 及び würde+Infinitiv なる書き換え形式の歴史的成立過程についての考察は終り, 次に, würde+Infinitiv の個々の用法について見よう。

A. 近代ドイツ語に於て, würde+Infinitiv という形式が用いられる代表的な場合は最初に述べた如く, 約束話法の結論部 (Apodosis) に於てであつて, 普通, 条件法 (Konditionalis) と呼ばれるのは, この場合のことを指しているのである。次に, 少し例を挙げてみよう。

1) Wenn ich dich nicht konnte, so würde ich dich nicht zum Weibe begehren, und mich kennt das grosse Rom sowohl wie diese Provinz. (G. Keller)

2) Klopft man an die Gräber und fragte die Toten, ob sie wieder auftreten wollten; sie würden mit dem Kopf schütteln. (Schopenhauer)

3) Man darf in der Sprachwissenschaft vor kühnen Hypothesen nicht zurückschrecken, ohne solche würden wir überhaupt keine Fortschritte in der Spracherkenntnis machen. (E. Wasserzieher)

4) Wäre dieser (Crowell) auf dem Schafott und jener (Karl I) im Besitze des Erfolges gestorben, so würden die Rollen umgekehrt verteilt sein. (C. Hilty)

5) Propheten meinen oft, sie machen, was sie sagen, / Ja, krähte nicht der Hahn, so würde es nicht tagen. (Rückert)

元来、接続法過去形の代りに、würde+Infinitiv で書き換え得るという根拠があるのであるが、条件法といえ、この結論部だけを指す程に、この場合に於て、würde+Infinitiv による書き換え形式が、何故に好んで用いられるのであろうか。Blatz が挙げたような形式的な面だけを取上げるならば、何も約束話法の結論部に限らず、いやしくも、接続法過去形が用いられる場合には何処でも、würde+Infinitiv の形が同様に見出されなければならぬ筈である。

成程、この約束話法の結論部に於ても、上例に見られる如く、弱変化動詞の場合に、この書き換え形式が用いられることが多いのであるが、そうでない場合も、少なくないのである。元来、約束話法なる思惟形態に対して、西洋語は、はつきりした意識を持ちこの思惟形態を表現するために、一定の形式が用いられている。特に、結論部に於て、最もはつきりしていると思われる。例えば、ロマン語に於ては、この結論部には、特別に conditionnel (条件法) という Modus があつて、これを表わす程である。ドイツ語は、この約束話法には、接続法過去群という形式を以て一般に表現するが、特に結論部の場合には、ロマン語に於けるが如く、一定の形式を以て表現せんとする傾向が、強く働いているという点にも、注意しなければならぬと思う。この形式として、würde+Infinitiv が、丁度適当なものなのである。

werden が、未来或は推測、想像を意味する助動詞としての用法が確立した後は、würde+Infinitiv の形式も、接続法過去形の単なる書き換え形式であるという意識よりも、むしろ、未来乃至は推測、想像の意味に解する意識が、漸次強くなる傾向にあると考えられるのである。しかるに、この約束話法に於ける結論部の場合には、この意識とも何ら矛盾しないのである。即ち、前提部と、結論とを、時称という点から比較してみると前提部は、どちらかと言えば、過去という意識が入り易いのに反して、結論部の方は、たとえ現在或は過去の事実が、問題になつている際でも、「未来」の事であるかのように考える事ができる。「未来」というよりは、むしろ、「推測、想像」と言つた方が、より適切であろう。従つて、近代人の語感からすると、約束話法の結論部に於ける würde は、単なる書き換え形式というよりは、むしろ、推測、想像を示す話法の助動詞と見做され易いのではないかと思われる。特に第二条件法たる würde+Infinitiv Perfekti の場合は、その成立時期から見ても、この説明の方が、より合理的であるように思われる。

故に、形式的には、明瞭に、接続法過去形であることが判るような場合でも、würde + Infinitiv による書き換えが、しばしば現われる。例えば：

1) Denn der Wechsel der Arbeit ist beinahe ebenso erfrischend als die nötige Ruhe. Ohne diese Einrichtung unserer Natur würden wir überhaupt nicht sehr arbeitsfähig sein. (C. Hilty)

2) Schriebe man Phänomén, Plagiát, Prätendént, synonym, oder Odéon, so würde der sonst Unsichere seine Zaghaftheit verlieren und das Wort ohne Furcht, etwas Falsches zu sagen, in den Mund nehmen. (E. Wasserzieher)

3) Früher muss das anders gewesen sein, sonst würde nicht 10 Orte Eschenbach heissen. (ibid.)

4) Wären diese Säulen, statt ins Meer, auf Neapel niedergefallen, so würde diese Stadt das Schicksal von Stabiä und Pompei erfahren haben und das Grab seiner Einwohner geworden sein. (J. G. Sommer)

5) Jedermann, der es zum erstenmal sähe, würde vor Entsetzen zurücktreten. (Goethe)

勿論、強変化動詞よりは、弱変化動詞を条件法を以て書き換える方が、はるかに多いと言える。第二条件法の形は、すでに hätte とか、wäre の形で、直接法と区別できるし、又この第二条件法の形は、余り冗長なので、第一条件法に比較すると、その使用度ははるかに少ない。

更に、話法の助動詞の過去形 könnte, müsste, dürfte, möchte, sollte, wollte 等は、すでに形式的にも、意味的にも、結論部に適當しているので、更にこれらの形を、条件法を以て書き換える場合は、むしろ稀である。又受働形の助動詞 würde を書き換える場合も、割合に少ないとすることができる。

次に、上述の助動詞が書き換えられた例を挙げる：

1) Weder Oldendorf noch Ida würden ihr Glürck einer solchen Opfer verdanken wollen. (G. Freytag)

2) Auch wenn ich es vermöchte, würde ich dies hier nicht wiedergeben mögen. (H. Mann)

3) ; für Kastanie würde eine unwichtige Stadt in Kleinasien dem Gedächtnis eingepägt werden müssen. (E. Wasserzieher)

4) ; das deutsche Kind heisst eigentlich Geborenes, Erzeugtes. Wir würden als König als Nachkommen eines Geschlechtes übersetzen können. (ibid.)

5) Würde diese Wärme aber dem ganzen Sonnenkörper gleich nässig entzogen, so würde seine Temperatur doch jährlich nur $1\frac{1}{3}$ Grad erniedert werden,………… (H. Helmholtz)

6) Mit diesem Rezepte würden die meisten nervösen Krankheiten unserer Zeit geheilt werden, und die meisten Kürärzte und Irrenärzte ihre Praxis einbussen. (C. Hilty)

約束話法の形式は、必ずしも現実の事実と反する仮定的な場合のみならず、事実上の要求乃至主張をば、謙遜して、婉曲に言い表わすためにも、この仮定的な形式を借りて表現する場合がある。一般にこれは外交的接続法 (diplomatischer Konjunktiv) と呼ばれている。この場合には、特に würde+Infinitiv による書き換えが好まれて用いられる傾向が強い。この際の würde+Infinitiv は、接続法過去形の単なる書き換えというよりは、würde が推測、想像を意味する話法の助動詞であるという意識が、特に強いように思われる。今日、会話、時事文、其他一般散文に於て使用される würde は、この種のものが一番多く現われると行うことができよう。次に、例を挙げてみよう。

1) Nehmen wir aber Sonnenuntergangs-oder Westland als Bedeutung von Europa an, so würde das griechische érebos—das Dunkel, das Finsternis gut dazu passen. (E. Wasserzieher)

2) Wer würde Buffons berühmtes Wort: le style, c'est l'homme übersetzen können mit „der Stengel, das ist der Mensch“? (ibid.)

3) „Sie würden sich nicht mehr zurückfinden. Es wird dunkel und der Weg ist beschwerlich. Kommen Sie doch.“ (H. Mann)

4) Wenn die Russen nun plötzlich doch Ja sagen, würde das in den westlichen Hauptstädten sehr gemischte Gefühl auslösen. Dann würde nämlich noch im Oktober die erste Vierer-Konferenz zusammentreten und…… (Zeitung)

5) Wenn die Sowjets solche konkrete Schritte unternehmen, so würden sie “die Vereinigten Staaten und die anderen freien Länder wie stets bereit finden, für den Frieden zu arbeiten”. (ibid.)

6) Dieser Schritt würde dem amerikanischen Senator McCarthy genügen, dem britischen Oberkommissar McDonald selbst als Kommunisten abzustempeln. (ibid.)

7) Für werden c. Part. bietet er nur zwei Belege; in beiden würde das einfache Verbum dem Sinne nicht entsprochen haben. (W. Wilmanns)

8) Als relatives auf ein Tempus der Vergangenheit bezüglichen Tempus der Zukunft würde dem präsentischen „wird geben“ die Form „ward geben“ entsprechen. (ibid.)

9) In den Fällen unter I und II könnte statt des Konj. Präs. auch der Konj. Prä. stehen; damit würde die Deutlichkeit der Beziehung auf die Gegenwart wegfallen. (O. Behagel)

10) Den Russen liegt aber nichts an guten Worten und netten Zusicherungen. Sie wollen mehr. Sie wollen den gegen sie gerichteten Bund sprengen. Lediglich die Zersetzung oder Auflösung der nordatlantischen Pakt-Organisation würde die Russen beruhigen. (Zeitung)

B. 約束話法の結論部に於いて、würde+Infinitiv による書き換えが、盛んに用いられた結果、この形が前提部に迄用いられるに至つた。特に Oberdeutsch に於て、しばしばこの語法が見られる。多くの学者は、前提部に於ける書き換え形式 würde+Infi-

nitiv の使用を誤りとして、排斥している。すでに結論部に条件法を使用した際、前提部にもこれと同じ形式を使用することは、文体の簡潔さを奪い、形として感心できないのは勿論ではあるが、心理的に見ても、前提部に於ける条件法の使用は、語感に反するからである。即ち、前提部と結論部とを時称という点から比較すると、前提部は、過去という観念が入り易いのであるが würde+Infinitiv の形は、近代人の語感からみると、接続法過去形の単なる書き換え形式であるというよりは、兎角未来の意味を示すように思われるからである。事実、近代の一般的用法としては、副文章に於ける接続法過去形と、würde+Infinitiv の形とを、区別して用いる傾向が強いのである。即ち、前者は現在を、後者は未来を示すのである。元来、約束話法に於ける未来というものは、少し曖昧な位置を占めている。約束話法の最もはつきりとその特徴を示すのは、すでに実現してしまった事柄に就いての場合であるから、現在又は過去に関して用いられるのが普通である。未来のことは、まだ実現していないからである。しかし、近代の傾向からすると、たとえ未来のことで、特にその実現に対して、疑いの気持を強調して表現せんとするときは、未来の形が用いられるのである。勿論、これは、werden が時の助動詞としての意識が確立した後の語法で、単なる書き換え形式としての würde+Infinitiv とは、その成立過程が異なるように思われる。しかし、未来の助動詞か、或は単なる書き換え形式か、はつきり区別できない場合が多いように思われる。

1) Würde der Donnersberg so hoch unmittelbar von der Rheinebene aus sich erheben, so würde jedermann erstaunen. (K. Mayer)

2) Wenn man die Werke nach der Weltanschauung, die ihre Künstler aussprechen, bestimmen würde, so würde keiner der österreichischen Sezessionisten in die Gruppe von Zorn kommen können. (H. Bahr)

3) „Dein Wunsch, O Aquilinus, mich zur Gattin zu nehmen, ehrt mich in hohem Grade, kann mich aber zu einer Ungewissheit hinreißen; und eine solche wäre es zu nennen, wenn wir ohne uns zu prüfen, dem ersten Antriebe folgen würden.“ (G. Keller)

4) Wenn alle wichtigen arbeiten würden, so wäre die sogenannte soziale Frage gelöst, und auf einem anderen Wege wird sie überhaupt nicht gelöst werden. (C. Hilty)

5) Wenn die von Taylor benutzten Messungswerte in aller Schärfe zutreffen würden, so wäre der Umfang der Pyramidenbasis gleich dem Durchmesser eines Kreises, dessen Durchmesser die Pyramidenhöhe ist. (Zeitung)

6) Wenn eine solche Flasche auf höher See aufgefischt werden würde, so könnte ich das begreifen, und…… (ibid.)

7) Wenn diese Annahme stimmen würde, dann wären die Japaner politisch intelligenter als manche anderen Völker, …… (ibid.)

次に未来の意味が強いと思われる例を挙げる。

1) Würde Sie auch die ganze Welt verdammen, ich würde Sie entschuldigen,

ich würde Sie lossprechen. (Lessing)

2) Warum sollte man nicht die Regierung nach jeder Kriegserklärung vor Gericht stellen? Wenn nur die Völker das begreifen würden, wenn sie selbst die Gewalten, die sie zum Mord führen, dem Gericht unterwerfen würden, wenn sie sich weigern würden, ……… dann würde der Krieg ausgerottet. (W. Wilmanns)

3) Die Kunst des Arbeitens ist die wichtigste aller Künste. Denn wenn man diese einmal recht verstehen würde, so würde ja jedes Wissen und Können erleichtert werden. (C. Hilty)

4) Das ist in London positiver aufgenommen worden als in Washington und in Washington positiver als in Bonn. Auch London will mit der Oesterreich-Frage beginnen, aber es würde uns nicht überraschen, wenn der Impuls zur Lösung der deutschen Frage von London ausgehen würde. (Zeitung)

5) Würde sich das Eisenhower-Programm auf das Wunschbild der totalen Globallösung beschränken, so wüssten wir nur das eine sicher, dass ………. (ibid.)

C. 次に、間接話法 (indirekte Rede) に用いられる würde+Infinitiv に就き、考察して見たいと思う。間接話法とは、一般に、他人の意見をその事柄の内容が事実なりとしての責任は負わず、単に伝達するという態度をとる場合である。近代のドイツ語に於ては、間接話法に於ける接続法の用法は、主文章の時称とは無関係に、接続法の現在群 (Präsensreihe) を用い、現在群が直接法の形と一致するときは、これと区別するために過去群 (Präteritumsreihe) を用いるのが一般的用法である。更に、敘述の内容を疑わしく、信を措き難いことを表わすためには、過去群が用いられる。例えば：

1) Er sprach mit ihr, dass der junge Mann ja ein gutes Wesen habe, aus einer ordentlichen Familie sei und tüchtig arbeiten könne, aber was wolle sie denn mit einem Krüppel anfangen. …… Das verständige Mädchen sah das ein und sprach, dass sie Beide das wüssten und sich gesagt hätten, dass sie nicht heiraten könnten, denn sie wollten kein Bettelvolk werden und fremden Leuten zur Last fallen; aber manches Mal, wenn die Dämmerstunde sei, dann wollten sie das Alles vergessen und wollten sich vorstellen, das Unglück sei nicht da Und sie selber wisse ja auch von sich, dass so eine Hässliche, wie sie sei, kein Mann heiraten möge. (P. Ernst)

2) Was? (Sagen Sie) Räuber wären es gewesen, die uns anfielen? ……… Mörder waren es, erkaufte Mörder! (Lessing)

3) Unterworfen hätte ich mich / dem Richterspruch der Zweiundvierzig, sagt ihr? Ich habe keineswegs mich unterworfen. (Schiller)

即ち、近代に於ては、現在群と過去群とは、何ら時称的な区別はなく、唯々現実に近いのか、現実と遠いのかの区別であるが、Mhd. までは、間接話法の時称は、主文章の時称に影響され、即ち時の照応が行われた。従つて主文章が過去時称の時は間接話法にも過去群が使用された。今日に於ても、方言や俗語に於て、特別にその必要がないのに過

去群を用いる語法が在し、ドイツ東南部・北部地方に於ては、特にこの傾向が強いと言われている。

上述の如く、間接話法に於ても、接続法過去群が用いられる場合が多いのであるが、その書き換え形式たる *würde+Infinitiv* は、いかなる位置を占めしているであろうか。直接話法に於てすでに用いられた条件法が、間接話法として述べられる場合は、そのままの形で間接話法でも表わされるので、これは前述の約束話法に就いての事項が適用されるのは勿論である。例えば：

1) Der arme Mann versicherte mich, dass er Mangel leiden würde, wenn ich ihn nicht unterstützte. (Blatz)

2) Derselbe sagte, dass er Hungers gestorben sein würde, wenn ich ihm nicht geholfen hätte. (ibid.)

而して、一般に副文章に於ては、単純なる接続法過去形と、*würde+Infinitiv* の形とを、区別して用いる傾向が強いので、間接話法の場合の *würde+Infinitiv* は、単なる書き換え形式というよりは、普通未来の接続法 (Konjunktiv Futuri) と解すべき場合が多い。しかし、地方によつては、非常にはつきりと、この書き換え形式が用いられている。例えば、Th. Matthias (Sprachleben und Sprachschäden, S. 384.) は、次のようなことを指摘している。

Ein Wächter über die Reinheit der Schriftsprache, der am Oberrhein daheim ist, klagt in der Zeitschr. f. d. deutsch. Unterr. sogar, dass dort der Konditional der Modus der indirekten Rede ist und gesagt wird: Er sagt, er würde vortrefflich tanzen statt er tanze vortrefflich. (この場合 *tanze=würde tanzen* ではなく、むしろ、*tanzte=würde tanzen* と解すべきであると思う)

上述の如く、近代の傾向からすると、*würde+Infinitiv* は、未来の接続法と解すべき場合が普通であるが、単なる書き換え形式として用いられている場合も、少なくないと思われる。又両者の区別を立てることが困難な場合もある。元来、ドイツ語では、副文章に於ては、前後の関係で未来であることが明瞭であり、特に未来のことを強調する必要がない場合には、現在形を以て代用する用法が広く行われているが、このような場合でも、しばしば *würde+Infinitiv* が用いられるのは、接続法過去形を、*würde+Infinitiv* を以て書き換え得るという意識が働いているのではないかと思われる。例えば：

1) Freunde von mir glauben, dass mir die Prinzessin im „Tasso“ liegen würde. (Zeitung)

2) Einer Reutermeldung zufolge erklärte der griechische Regent, Erzbischof Damaskinos, dass er im Amt bleiben würde. (ibid.)

3) Denjenigen, die für eine Nichtintervention in Persien einträten, könne man sagen, dass eine solche Haltung der Preisgabe der britischen Interessen in diesem Lande gleichkommen würde. (ibid.)

4) Die Opposition brachte die sarkastische Anfrage ein, welche Erleichterungen dem Untersuchungskommissaren des Senators McCarthy gewährt werden würden.

(ibid.)

間接話法に於て、未来の接続法を用いる場合でも、一般的用法からいうと、現在群の方の形を使用すべきであるが、上述の如く、過去群の方の形が用いられることも、しばしばあるが、特に主文章が過去時称の時は、この未来の接続法は、他の場合と比較して過去群の方の形を使用する機会が圧倒的に多いように思われる。尤も、推測、想像を意味する werden の場合は、一般的用法に従うといわれている。次に、主文章が過去時称の際、würde+Infinitiv の形が用いられた例を挙げる。

1) Ich versicherte ihn, dass die Prinzessin sich bei ihrem Vater verwenden und die Gnade des Fürsten für ihn wieder erlangen würde. (Goethe)

2) Ich konnte hoffen, dass Sie auf meinen Brief vom 8. Mai gleich zurückkehren würden. (ibid.)

3) Er sagte, wenn sie sein Gut verkaufen würde, sei er ruiniert. (Bibel)

4) Sie hielten mich für einen Burschen, der zu nichts zu brauchen sei, und aus dem niemals etwas werden würde. (Tieck)

5) Und er nahm es unzählige Male hervor, um einen neuentdeckten, leichtfertigen Namen beizufügen oder zu berechnen, welche der Inhaberinnen demnächst an die Reihe kommen würde. (G. Keller)

6) In M... einer bedeutenden Stadt im oberen Italien, liess die verwitwete Marquise von O....., durch die Zeitung bekannt machen; dass sie, ohne ihr Wissen, in andere Umstände gekommen sei, dass der Vater zu dem Kinde, das sie gebären würde, sich melden solle; und..... (H. Kleist)

7) Unabhängige Beobachter der japanischen Entwicklung hatten schon lange prophezeit, dass der Samurai, das heroische Ideal des japanischen Rittertums, nur unter der Oberfläche der demokratischen Umziehung schlummere und bei der ersten Gelegenheit sich wieder setzen würde. (Zeitung)

8) General McNarney führte vor Pressevertretern aus, es seien bereits Pläne für die Herstellung der wirtschaftlichen Einheit der vier Zonen ausgearbeitet worden..... Käme es zu einer wirtschaftlichen Einheit der amerikanischen und britischen Besatzungszone, so würde eine gemeinsame Verwaltung aller Nahrungsmittelvorräte errichtet werden. Die Lebensmittelrationen in beiden Zonen würden gleich sein. Durch den freien Austausch von Rohstoffen und eine Belebung der Industrie würde der Güteraustausch gefördert und würden Ausfuhr Güter geschaffen werden. Dadurch würde es möglich sein, Nahrungsmittel einzuführen und den Lebensmittelstandard der Bevölkerung zu erhöhen. (ibid.)

主文章が過去時称である時、間接話法に於て、würde+Infinitiv の形が用いられる傾向が特に強いのは、注意すべき点であると思う。この場合の未来の接続法 würde+Infinitiv は、一個の明確なる意味を表わしている。即ち、「過去に於ける未来」(Futur in der Vergangenheit) を表わす一つの形式と考えられる。この「過去に於ける未来」を表

わす würde+Infinitiv という形式も、正に条件法 (Konditionalis) と呼ばれるにふさわしいものであると思う。即ち、条件法が一つの独立した Modus として存在するフランス語に例を取つて見ると、条件法 (conditionnel) は、起原に於て専ら、又現代に於てもしばしば、「過去に於ける未来」(futur dans le passé) という時を意味している。即ち、主文章が任意の過去時称に置かれ、その命題に従属する文章で、未来を表わすために用いられる。この未来は、単に主文章の過去より後に起るであろう事実を述べているに過ぎない。フランス語の「過去に於ける未来」を表わす条件法 (conditionnel) に相当するものが、ドイツ語では、würde+Infinitiv の形式であると考えることができる。例えば、フランス語をドイツ語に訳する際、フランス語の「過去に於ける未来」を示す条件法を、ドイツ語では、würde+Infinitiv の形式を以て表わしている場合が多いところを見ても、このことが窺えると思う。

1) Miss Lydia lui jeta un regard plein de dignité, et, s'adressant au matelo, lui demanda quand la goélette arriverait au port. (P. Mérimée)

Miss Lydia warf ihm einen Blick voll selbstbewusster Würde zu und sich an den Matrosen wendend, fragte sie, wann das Schiff den Hafen erreichen würde.
(Deutsch von J. Möllenhoff)

2) Mais Orso se hâta de le remercier et de dire qu'ils auraient bien le temps de causer à Pietranera. (ibid.)

Orso aber beeilte sich dafür zu danken und versicherte, dass sie in Pietranera Zeit genug haben würde. (ibid.)

3) ; maintenant, déconcerté par ses plaisanteries, il se disait qu'il n'était à ses yeux qu'une simple connaissance qui bientôt serait oubliée. (ibid.)

Jetze, da er sich durch ihre scherzhaften Reden verwirrt fühlte, dass er ihr nicht mehr gelte, als jede andere flüchtig geschlossene Bekanntschaft, die bald vergessen sein würde. (ibid.)

4) Orso demandait à Colomba si elle avait fait quelque découverte, elle répondit qu'elle s'expliquerait devant le préfet, (ibid.)

Orso erkundigte sich unterdessen bei Colomba, ob sie unter den Papieren irgend etwas von Belang gefunden habe; sie antwortete, dass sie sich in Gegenwart des Präfecten darüber erklären würde. (ibid.)

5) ……Evviva Ors'Anton ! répèterent en chœur tous les bergers. Nous savions bien qu'il reviendrait à la fin ! (ibid.)

„Evviva Ors Anton!“ wiederholten die versammelten Hirten im Chor. Wir wussten es wohl, dass er endlich heinkehren würde. (ibid)

更に、würde+Infinitiv が、「過去に於ける未来」を示す特定の形式として、如何に結晶したものであるかは、次のような場合に、更にはつきりしていると思う。

Allerhand Gedanken gingen ihm durch den Kopf. Sein Aemtlein freilich verlor er, wenn die Zensur abgeschafft wurde …… was tat es ? Dann würde er eine

Zeitung gründen. (E. Ertle)

上の文章に於て、Sein Aemtlein 以下は直接法 (würde—gründen は除く) で書かれているが、元来は一種の間接話法で、ただ独立した形式で書かれているに過ぎない。(以下これを独立的間接話法と呼ぶことにする。) 独立的間接話法は、普通物語調の過去に多く現われ、従つて、独立的間接話法に於ける過去は、直接話法の現在、或は未来の代用たる現在に相当し、過去完了は、直接話法の現在完了、或は過去に相当するのである。而して、特に未来を示めすために、ich werde+Infinitiv に対して、ich würde+Infinitiv という形がないので、接続法の würde+Infinitiv という形が用いられるのである。尤も心理的に見れば、物語は普通過去の事柄に属しているのだから、過去に於て未来を述べるのは、単に想像の世界に属しているのだから、接続法の würde という形が用いられるのは当然であるが、しかし、「過去に於ける未来」を表わす一定の形式があれば、これを用いるのが自然であると言えよう。ドイツ語では、würde+Infinitiv がこれに相当するわけである。しかし、ドイツ語では、この場合でも一般的には、過去(即ち、直接話法に於て未来の代用たる現在)が用いられ、上に挙げた文章でも verlor, abgeschafft wurde, tat はいずれも、直接話法では未来を表わす現在であり、必要ならば、würde+Infinitiv を以て書き換えることができるわけである。独立的間接話法に於ける würde+Infinitiv の用法は、比較的新しいものであり、しかもフランス語の影響が強いと言われている。フランス語に於ては、ドイツ語の独立的間接話法に相当するものは、自由間接敘法 (style indirect libre) と一般に呼ばれ、直接敘法 (style direct) で未来の意味は、自由間接敘法では条件法 (conditionnel) を以て表わされる。例えば：

1) Maryan considérait Lange avec inquiétude : il aurait froid, ……il ne pouvait supporter de souffrir, il s'ennuierait ……………. (Mauriac)

2) Elle (Emma) se réveillait en d'autres rêves ……………. Ils (Emma et Rodolphe) habiteraient une maison basse à toit plat, ombragée d'un palmier, au fond d'un golfe, au bord de la mer. Ils se promèneraient en gondole, ils se balanceraient en hamac…………… (Flaubert)

次にドイツ語の例を挙げる。

1) Er freute sich auf den Tag. Die Stunde war sein. In dieser Stunde würde er sie alle, die Verwandten und Bekannten, die Lehrer und Schüler, das ganze Gymnasium und viele Freunde…………… in seinen Händen halten. (Stilgebauer)

2) Sie hörte plötzlich anf, liess die Hände in den Schoss sinken und starrte ins Leere. Ja, warum denn eigentlich? Es war doch nicht Unrechtes geschehen. Das konnte ihr Marianne und jedermann bezeugen. Und ganz gewiss, sie hatte nicht mit der Miene, nicht mit einem Wort Herrn Bodmann Gründe gegeben, sich in sie zu verlieben. War er denn überhaupt in sie verliebt? Nein, er empfand nur eine schöne, warme selbstlose Freundschaft für sie. Günther würde sich darüber freuen, dass ein so ausgezeichneter Mann sie einer edlen Freundschaft würdige.

(Berlepsch)

D. 実現し得ざる、またはし得なかつた願望 (irrealer Konjunktiv des Wunsches) を表わすには、接続法過去群が用いられる。例えば：

Käme er doch! — Wäre er doch gekommen! — O dass ich das Glück hätte, einen von euch bei mir zu haben! — Wenn er doch noch lebte! — Eilende Wolken! Segler der Lüfte! Wer mit euch wanderte, mit euch schiffte! (Schiller)

この場合に於ても、接続法過去形と würde+Infinitiv の形式を以て書き換えることが、しばしば行われる。特に Oberdeutsch に於て、その傾向が強いと言われている。しかしこの場合、würde+Infinitiv を以て書き換えることを、多くの学者は特に強く排斥している。

1) Würden die Reichenberger sich nur die Zittauer zu Muster nehmen! (Zeitung)

2) Justinus Kerner schreibt: Würdest du ihn nur kennen! (K. Mayer)

3) O, Wenn doch der Herr Assessor mal kommen würden! (Raabe)

4) Wenn sie (die Rosen) doch nicht welken würden! (H. Böhlau)

この場合に於て、würde+Infinitiv による書き換えが排斥されるのは、この形式が語感に反するようと思われるからであると思う。即ち、現実と反対のことを願望するとき、過去という意識が強いのに、この würde という形は、兎角未来の意味を示し易いからである。故に現代の用法としては、むしろ、単純な過去形と、würde+Infinitiv とを区別する傾向が強い。即ち後者は未来のことにつき、その実現が疑しいことについての願望を表わすのである。例えば：

Wenn er nur hier wäre! (現在) — Wenn sie (die Rosen) doch nicht welken würden! (未来)

E. als ob, wie wenn, als wenn 等の接続詞を先頭に有する、所謂比較文章 (Vergleichungssatz) に於ても、しばしば接続法過去群が用いられる。

1) Ich halte Egmont hier, als ob ich ihn noch was zu sagen hätte. (Goethe)

2) Nettchen lehnte sich so zufrieden an ihn, als ob er eine Kirchensäule wäre. (G. Keller)

3) Albert hatte die Empfindung, als wenn die Welt um ihn plötzlich totenstille würde. (Schnitzler)

4) Die kleinsten Umstände dieses Zufalls stehen mir vor Augen, als hätte er sich gestern ereignet. (Goethe)

この場合、接続法過去形を würde+Infinitiv で書き換えた例が、しばしば見出される。

1) Sie liessen sich gar nicht bei uns sehen, wie wenn sie das Elternhaus geflüchtlich fliehen würden. (G. Keller)

2) Jetzt fängt er verdriesslich wieder an zu graben; aber es war, als wenn er in einem Steinboden einhauen würde, alles umsonst. (W. Fischer)

単純な過去形と、würde+Infinitiv とを、区別せんとする傾向は、この比較文章に於

ては、特に顕著であると言われている。

1) Er spricht von meinen Besitzungen, als wenn ich so reich wie ein Herzog wäre. (現在) Die sehen nicht aus, als wenn sie so bald Brüderschaft mit uns trinken würden. (未来) (Goethe)

2) Wie sie laufen, als ob sie aus Zucker wären (現在) und die schweren, frischen Regentropfen an ihnen lecken und auflösen würde. (未来) (H. Böhlau)

3) Es gewinnt den Anschein, als ob sich im Schosse der Fortschrittspartei eine Spaltung verbreitete (現在) und die Partei in zwei Fraktionen zerfallen würde. (未来) (Zeitung)

4) Mir ist zu Mute, als ob ich geschlagen würde. (現在) Ich habe überhaupt manchmal ein Gefühl, als ob sich Hannes schon allein wieder 'rausarbeiten würde. (未来) (Hauptmann)

F. 主文章と副文章とが、否定的関係を有する場合にも接続法過去群が用いられる。(negativ beeinflusster Konjunktiv) 例えば:

1) Er ist grösser, als dass ihm der Neid schaden könnte. (Blatz)

2) Er verdient es nicht, dass du die Freiheit ihm zum Opfer brächtest. (ibid.)

3) Sie schien aufmerksam auf das Gespräch, ohne dass sie daran Teil genommen hätte. (Goethe)

この場合にも、würde+Infinitiv による書き換えと思われる用例がある。

1) Es gibt heute wohl niemand mehr, der sich nicht freuen würde, dass die Arbeitsklasse nicht mehr dem Diktat seines Industriemagneten ausgeliefert ist. (Zeitung)

2) Ihm hätte es häufig, selbst durch den ärgsten giftigsten Schnupfen hindurch, dreist nach moderigem Stroh riechen können, ohne dass er sich darob gewundert haben würde. (Raabe)

3) Der könnte unter Blitz und Donnerschlag / Das ganze Reich der Mark versinken sehn, / Dass er nicht fragen würde: was geschieht? (Kleist)

4) Dies hat niemals bedeutet, dass Israel nicht die Politik anderer Länder unterstützen würde, wenn sich diese vorteilhaft und richtig erweist, oder dass Israel sich von vereinbarten internationalen Aktionen fernhalten würde. (Zeitung)

以上、würde+Infinitiv という形が用いられる大体の筋道について考察したのであるが、結局、würde+Infinitiv は、元来、接続法過去形の単なる書き換え形式となりうる歴史的根拠を持ち、現に広範囲に亘って、書き換え形式として用いられているが、werden が未来乃至推測、想像を意味する助動詞としての用法が確立した後は、würde+Infinitiv の形は、単なる書き換え形式というよりは、むしろ、時或は話法の助動詞としての意味が強く意識され、従って、単純なる過去形と、würde+Infinitiv の形とを、区別して用いる傾向が強いと言わなければならない。而もこの場合でも、würde+Infinitiv を一つの独立した形式と見做すことができる用法が存するように思われる。

兎に角も、この würde+Infinitiv という形式が、現今に於ても、時事文、其他一般散文に於て盛んに、否むしろ、乱用といつてもよい程用いられているという事実は、E. Koelwel (guter Deutscher Stil, 1947, Berlin) が、次のように述べていることから十分察せられると思う。

Sehr bedauerlich ist würde-Unfug: er würde bringen, würde fahren, würde ziehen. Manche Schreibende scheinen die schönen starken Konjunktivformen brächte, führe, zöge, absichtlich zu vermeiden, um nicht in den Verdacht zu kommen sich allzu gewählt auszudrücken. Dabei muss das Verleugnen dieser Zeitwortformen notwendig zu einer Verarmung unserer Ausdrucksweise führen. (S. 9)

Billige den starken Zeitwörtern die Abwandlungen zu, die ihnen gebühren, und wenn es neben er backte noch die vollmundige Form buk gibt, so pflege sie und schäme dich auch nicht, die schöne Konjunktivform büke zu gebrauchen, mögen andere sie auch für affektierte Ausdrucksweise halten. Sie ist es nicht, sondern gutes, sondern das beste Deutsch. Er trüge, stünde, sänge, führe; sind sie nicht saftiger fast möchte man „prächtiger“ sagen als die verwaschenen: würde tragen, würde ziehen, würde stehen, würde singen, würde fahren? Eine Würderei ohne jede Würde. (S. 43) (30. 1. 1954)

主要参考書目

- O. Behagel: Deutsche Syntax
 Fried. Blatz: Neuhochdeutsche Grammatik
 G. O. Curme: A Grammar of the German Language
 E. Koelwel: Guter Deutscher Stil
 Th. Matthias: Sprachleben und Sprachschäden
 W. Wilmanns: Deutsche Grammatik
 L. Sütterlin: Neuhochdeutsche Grammatik
 J. C. A. Heyse: Deutsche Grammatik
 相良守峰: ドイツ文章論
 “ ” : 独乙語学概論
 関口存男: 接続法の詳細

Auszug**ÜBER DIE VERWENDUNG VON „WÜRDE+INFINITIV“**

Fumio NARA*

Die mit „würde“ umschriebenen Nebenformen des Konjunktivs Präteriti heißen, wenn sie nicht zur Bezeichnung der Zukunft, sondern zum Ausdruck einer Bedingung dienen, im allgemeinen „Konditionalis“. Die Umschreibungen des einfachen Konjunktivs mit der Form „würde+Infinitiv“ werden aber nach ihrem Ursprung nicht nur in konditionalen Sätzen, sondern häufig auch in manchen anderen Fällen, wo überhaupt die Konjunktive Präteriti stehen können. Doch zeigt die Form „würde+Infinitiv“ in neuester Zeit die Neigung, die reinen Umschreibungen des Konjunktivs Präteriti nicht darzustellen, sondern etwas von ihrer temporalen oder modalen Bedeutung zu behalten.

Ich will hier erörtern, in welchem Umfange die Form „würde+ Infinitiv“ verwendet wird und was sie dabei bedeuten will.

* a. o. Professor der Deutschen Sprache und Literatur an der Universität Shinshu.